

「こつて丑の能う肥へたのに背中にすぎ鍋を背負ふて、中に葱と焼豆腐を入れるとジユウーと泣くと云ふ丑は無いか」

「そんなすぎ焼みたいな丑はおまへん」

「兎に角、寝丑と、饅頭喰ひと虚無僧を貰ふ、皆で何程や」

「ちようど五百だす」

「誰がぼやくねん」

「ぼやくやおまへん、五百だす」

「ア、そうか、一寸提げる様にしとゐて、錢は此所へおいとくで」

「有難うさんで」

「甚い邪魔を仕たな、それ土産が出来た出とおいで」

「参りましたのは、伏見寺田屋の濱、夕方に成りますと船に乗るお客さんを呼んで居ります。

「へエ、あんさん方お下りさんや御座いまへんか、へエ／＼あんさんお下りさんやおまへんか、そちらの顔の色の悪い方、あんた下らんか」

「イ、エ、けつしてます」

「オイ、何を云ふてるねん」

「彼の人が私の顔を見て、下らんかと云ふて尋ねてはるので、私一昨日から便所へ行かずや」

「違ふ／＼、船に乗つて大阪へ歸る事を下らんかと云ふてるのや」

「ア、そうか、そんなら大阪へ歸つて下ります」

「そんな可憐に云はんでもえ、オイ船はすぐに出るか」

「へイ、すぐに出ます、何卒御一服を」

「そんなら待たして貰ほう」

二階へ上りますと、二階には御客さんが澤山待つて居ります。此の待つて居る間は退屈と見へて、皆それ／＼手そぐりを仕て居ります。日記をつけて居る人、錢勘定を仕て居る人、てんや物を食べる人、本を讀んでる人、又此方では伏見人形の大きな丑を買て來て荷造りが仕て有るのを解いて角をボキツと折つてあわて／＼ついである人が有る、是をあわて／＼いださかゝると云ふて元の様につけるものや無いが、人間の癖と云ふ物は妙なもので、茶碗を破つても一ぺん缺けをさがしてひつ／＼けて見る物で、まだそんなのは宜しいが芋などを食べてる人を見ると、嚙り口を見んと後を嚙らんもんで、汚ないのは鼻を拭いてすぐに捨す人は無いもので、一度は開けて見ます汚い癖が有りませ、種々の手そぐりを仕て待つて居りますと。其所へ参りましたのが船宿の番頭さんで。

「へエ、何方さんも甚い永らくお待せ致しました、もう程なく船が出ます、誠に御面倒さんどすが皆